

「それが不思議やね、私かて紋も型もない事を云ひそうな事がない、ナア姐貴、甚い濟んが一遍私と一緒に稽古屋まで来てんか」

「次良はん稽古屋へ何しに行くのんや」

「常やんが居るか見に」

「次良はんしつかりしいや、貴郎何處ぞおかしな處へ小便でもしたんやないか、今現在此處に常はんが居るのに常はんを見に行くやなんて其様な阿呆らしい事が出来るかいな」

「けども餘り不思議な依つてに、姐貴に見て貰ふて似た人が居てたら私が間違ふのも無理がないと解る依つてに」

「そうかてそんな阿呆らし事が有るかいな、常はん何なにしまへう」

「お前が餘り仕様むない格氣をする依つてにや仕方がない、次良貴も歸る機會しほがないのんや従いて居て遣れ」

「そうかて」

「マア宜いわい途中で逃げたらほつとけ、逃がして戻つて來い」

「そんなら次良はん行きなはれ従いて行たげる、眞實ほんまに之れに懲りて今度から此様な惑亂をしなはんや」

「姐貴甚い氣毒なナア、そんなら常やん一寸姐貴を貸つて行くぞ」

「サア〜用事の無い暇な身體やせいで使ふてや」

「ほい〜姐貴濟んな」

「サア次良はん妾が此方向いてる依つてに早う逃げなアレ」

「イヤ逃げへん稽古屋まで行て貰ふ、こんな妙な事はない、姐貴來た待つて〜や、此の格子の間から覗いたんや、姐貴居て〜や、矢ツ張り居るがな、サア姐貴私の目が違ふてるか、一ツあんどよう見て」

「何か次良はん宅の常はんが居るか」

「居るとも、居るとも覗いて見」

「何處にや、アレ次良はん、あれ宅の常はんや、エ、腹の立つ」

「オイ姐貴何をするね、私の胸倉を締めて、どうするね、咽の佛はんが潰れるがな、放してんか、ア、苦し」

「次良はん、宅の常はんが差向ひで一杯飲んでる」

「それ見いな姐貴」

「マアあないに宅で立派に口で云ふて居て、夫れで此處で一杯飲んでるのは、妾合點がいかん、何